

陶磁器からみる長崎と海外とのモノ交流

ー肥前磁器と「唐人」、「唐船」の関わりについてー

長崎大学 野上 建紀

はじめに

グローバル化は1571年に始まったと言われる（フリン2010）。大西洋と太平洋の二つの大洋を越えて、アジアに到達したスペイン人によってマニラが建設された年である。マニラが建設されるとまもなくマニラ・アカプルコ間のガレオン貿易ルートが開設された。いわゆる「旧世界」のアジアと「新世界」のアメリカが直接、貿易を行うようになり、ヒトとモノが新旧の世界間を往来するようになった。そして、次のような詩がうたわれた。

「メキシコでスペインと中国が一つになる。イタリアと日本が一つになる。やがて貿易と政治によって一つの世界になる。」(En ti se junta España con la China, Italia con Japón, y finalmente un mundo entero en trato y disciplina. Bernardo de Balbuena, Grandeza Mexicana, 1604)。

この叙景詩が示すとおり、まさに東西交流の新たな舞台がアメリカ大陸に生まれたのである。そして、マニラが建設された同年に、アジアで一つの港が開港している。長崎である。マニラがスペイン人によって建設されたのに対し、長崎はポルトガル船の来航によって開かれた。スペインとポルトガルはともにヨーロッパ大陸から西に飛び出たイベリア半島にある海洋国家であり、スペインが西回り航路でアメリカを「発見」し、太平洋を横断して、アジアに到達したのに対し、ポルトガルは東回り航路で喜望峰を発見して、インドに到達し、マラッカ、マカオへと東にたどり、日本に到達し、キリスト教や鉄砲を伝えた。例えて言うなれば、スペインが西回り航路で伸ばした指先がマニラであるすれば、長崎はポルトガルが東回り航路でいっぱい伸ばした指の先であった。長崎は、マニラとともに、グローバル化の文脈の中で生まれた港であり、国際的な港市となっていった。

その後、日本は他の東アジアの国と同じように、海禁を行い、いわゆる「鎖国」政策が始まるが、それでも長崎は江戸時代の対外交渉・交易の窓口であった「四つの口」の一つとなり、西洋との唯一の窓口にもなった。限られた間口ではあつ

たが、長崎では多くのモノが行き交った。肥前地域で生産された磁器もその一つである。積み出し港の名前に由来して、「伊万里」や「イマリ」とよばれるもので、ポルトガルが開発した東回り航路を引き継いだオランダの船によって、遠くヨーロッパまで運ばれ、ヨーロッパ各地の宮殿や城を飾ることとなった。九州の一部の地域で生産された磁器が世界商品となり、長崎から広く海を渡っていったのも近世のグローバル化の過程と連動していた。

しかしながら、肥前磁器が真の意味で、「世界商品」となれたのは、オランダのみがその役割を果たしたわけではない。むしろ、グローバル化が始まる前の古代、中世から続くアジアの海域ネットワークによるところが大きい。中国磁器が有していたそのアジアの海域ネットワークを引き継いだからこそ、なしえたことなのである。例えば、肥前磁器は太平洋を越えて、アメリカ大陸へと渡っていった。太平洋を渡って運んだのはスペイン人たちであったが、彼らに肥前磁器を渡したのは、オランダではなく、「唐人」であった。「唐人」が「唐船」で運んだ肥前磁器をスペイン人たちは入手していたのである。

よって、ここでは主に長崎から世界へ輸出された肥前磁器を取り上げ、その生産や輸出において、「唐人」や「唐船」がどのように関わったか、そして、その関わりの舞台としての長崎について書いていきたいと思う。

なお、本文は記念講演会『連綿と続く長崎と中国の絆』（2017年11月16日、長崎歴史文化博物館）の中で「陶磁器からみる長崎と海外とのモノ交流」と題した講演の内容を改めて文章としてまとめたものである。

1. 肥前磁器の始まり

肥前は、近世の新興の窯業地であった。豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、渡海した大名たちは朝鮮人陶工を日本に連れ帰った。彼らは九州地方を中心に釉がかかった施釉陶器の生産を始めた。その結果、唐津焼(佐賀県)が飛躍的に発展し、上野・高取焼(福岡県)、萩焼(山口県)、薩摩焼(鹿児島県)など新たな窯場が興った。そして、朝鮮人陶工の中には有田焼の陶祖とされる李参平(日本名:金ヶ江三兵衛)も含まれており、17世紀初めには日本で最初の磁器が、有田あたりで誕生した。この磁器創始について、「唐人」がどのような関わりをもっていたか、よくわかっていない。磁器生産の技術母体は朝鮮半島の技術であることは確かであるが、生産された磁器は最初期から朝鮮風の磁器ではなく、中国風の磁器であった。それは日本の市場では中国風の磁器が好まれていたからである。そして、それは呉須とよばれる天然コバルトを顔料として文様を描いた染付製品であった。当時、

日本国内では呉須は入手できなかったもので、それは輸入に頼るしかなく、入手先は大陸からそれが輸入される長崎などの港市ということになる。おそらく長崎などの「唐人」が何らかの形で関わったであろうことは推測されるし、当時の長崎などには連れてこられた朝鮮人も在住しているので、彼らを介して「唐人」と接触することも容易であったとは思いますが、それ以上のことはわからない。

そして、磁器生産が始まった当時は、佐賀藩・大村藩・平戸藩の藩境周辺に窯業圏が形成されていた。もともと窯業に適していた土地であったことは確かであろうが、異郷の朝鮮半島より連れて来られた者同士、藩を越えて寄り添い、助け合うことは自然な成り行きであったのかもしれない。いずれにせよ彼らは藩を越えて、技術と情報を共有しながら、窯業を営んでいた。非常に類似した製品を各窯場で生産していたことからその共有性を理解できる。後掲の『肥陽舊章録』の中に書かれているような「唐人之内ニも、他国より参、其所ニ家を持候はぬ者」が数多くいたのであろう。この場合の「唐人」は中国人ではなく、朝鮮人のことである。

そして、当時は有田の西部地区の天神森窯や小溝上窯などが中心的な窯場であり、窯の数や磁器製品の種類や量も他の窯場を圧倒していた。この有田の西部地区が求心力となり、さらに窯業圏が拡大していった。朝鮮人陶工のみならず、多くの日本人陶工も集まり、窯業を営むようになったのである。自然発生的に生まれ、無秩序に拡大しすぎた窯業に対し、佐賀藩がとった方策が寛永14年（1637）の窯場の整理統合とそれに伴う日本人陶工の追放である。

この窯場の整理統合によって追放された日本人陶工は826人であったという。廃止された窯場が伊万里4ヶ所、有田7ヶ所の計11ヶ所であるのに対し、統合された範囲の窯場が13ヶ所であることを考えると、朝鮮人陶工を中心に窯業を営むことが許された陶工は1000人を超えるものであったと推定される。おおまかな推定ではあるが、相当な人数であったことは確かであろう。

窯場の整理統合は、燃料となる薪の採取のために山を伐り荒らすことから、肥大化した窯業を縮小するために行ったことであるが、同時にいくつかの目的を達成している。

一つは朝鮮人陶工の保護と他藩からの流入民の排除、一つは磁器生産の専門化と本格化、そして、排他的な窯業圏の形成である。

まず朝鮮人陶工の保護と他藩からの流入民の排除についてである。朝鮮人陶工の保護については、日本人陶工826人が追放されていることから明らかである。『皿山代官旧記』には、当時のいきさつとして「正右衛門が白川山天狗谷に一登りの窯を築いて窯焼きをしている頃、多久美作守様が朝鮮から連れて帰られた唐

人で、はじめは御側に仕えていたが、暇を乞うて優秀な磁器を焼く者がいた。この唐人が「自分が一手に焼き物をしたいので」と日本人陶工を追放するようお願いした。その結果、日本人は窯焼き職を営むことができなくなった。」とある（有田町史編纂委員会1985）。これは日本人陶工である家永正右衛門の子孫が、先祖の功績を訴える中で記したものである。窯場の整理統合事件から百数十年以上経った後の文献でもあり、実際に唐人（朝鮮人陶工）が願い出たものかどうかは不明であるが、そのように思わせるような保護政策であったのであろう。また、『肥陽舊章録』によれば、鍋島勝茂は寛永14年3月20日、多久美作にあてて、次のように命じている。全ての朝鮮人陶工が窯業を営むことを許されたわけではないようである。

「古唐人・同嫡子、一職数年居付候て罷在候者ニハ、何様焼物可差免事。唐人之内ニモ、他国より参、其所ニ家を持候ハぬ者ハ、可相払事。又扶持人・従者・町人・旅人、此者共何も焼者先様御法度可申付、但、其所に居付候て罷在候者、百姓を仕可罷居と申者ハ、其まま召置、焼物ハ不仕様堅可申付事」

この場合の「唐人」も朝鮮人陶工である。主に唐人の扱いについての命であるが、これは日本人陶工については原則、追放されるものであるため、ここでは記されていないだけである。興味深いのは、前にも触れたが、「唐人之内ニモ、他国より参、其所ニ家を持候ハぬ者」の部分である。藩境を越えて来藩し、居候している朝鮮人陶工がいたということであり、今後はそうした人物は追放するという趣旨である。初めて磁器が焼かれた1610年代頃に比べると、幕藩体制も確立し、また、朝鮮人陶工たちも慶長の役よりすでに40年近くが経っており、名実ともに日本への帰化が進んだことにより、アイデンティティーが変化し、藩を越えて寄り添う必要もなくなっていたと思われる。特に寛永14年（1637）は島原の乱の年であり、当時はキリシタン弾圧も強まっていた。他国よりキリシタンをはじめ、素性の知れない人物が容易に往来する環境は望ましいものではなかったのであろう。

次に磁器生産の専門化と本格化についてである。窯場の整理統合が、より付加価値が高い磁器生産の保護育成をねらったものでもあったことは（大橋1989：23）、窯場が統合された範囲が泉山磁石場に近い地域が中心であったことから理解できる。農業と窯業を切り離し、そして、陶器生産と磁器生産を引き離す施策であり、磁器生産を分業化する施策と言ってよい。そして、これを可能にしたのが泉山磁石場の発見であることは言うまでもない。佐賀藩の窯場の整理統合のような

政治事件がなかった大村藩においても藩境に近く、農業にも適した村木地区の窯場が廃され、磁器原料産地である三股砥石川採掘場に近い三股地区などに窯場が移ることを考えると、磁器原料産地がある地区においては、陶器生産から磁器生産へという移行には経済的な必然性があったということであろう。

最後に排他的窯業圏の形成である。藩境の近くにそれぞれの藩が窯場を形成していた頃は、技術と情報を共有しながら、窯業を営んでいたが、それを排他的な窯業圏の形成に向かわせたのは、やはり泉山磁石場の存在であろう。この豊富で良質な磁器原料を藩の重要な資産と考え、他藩への流出を防ぐことを考えた。遅くとも江戸中期以降は、有田皿山は、内山を中心とした生産体制を形成していたが、それは泉山陶石の管理に基づくものであった。つまり、上質な泉山陶石は「内山」で使用し、やや質の劣る泉山陶石を「外山」で使用し、「大外山」では泉山陶石そのものを使用させないとする制度である。この人（技術）と原料の流出を防ぐ排他的な窯業圏の形成によって、それぞれの産地の原料と技術に立脚した陶磁器が生産されるようになった。有田焼、波佐見焼、三川内焼のそれぞれの地域的な産地の成立と言ってよいだろう。

2. 肥前磁器の海外輸出の始まり

明から清への王朝交替は、急速な発展過程にあった肥前の窯業界にとって大きな飛躍の土台となった。17世紀初めに国産の磁器生産を開始したとはいえ、日本もまた中国磁器を盛んに輸入していた。そのため、質的にも量的にもまだ中国磁器を補完する程度の生産に過ぎなかった。それが王朝交替に伴う中国国内の混乱により、それまで世界中に供給されていた中国磁器の輸出が鈍り、その市場の空白を埋めるように、肥前磁器が国内市場に浸透していった。1637年から1648年の10年余りの間に、当時の雑税の一つである皿山の運上銀が1カ年2貫100匁から1カ年77貫688匁になるなど、飛躍的な生産高の伸びを見せるのである（大橋1989：25）。

中国磁器の海外輸出の減少によって、磁器が欠乏したのは日本だけではなく、海外においても同様であったため、肥前磁器は海外へも運ばれ始めた。肥前磁器の海外輸出の記録の初見は、1647年に長崎を出帆してシャム経由でカンボジアに行く一艘の唐船に「粗製の磁器174俵」を積んでいたという記載である（山脇1988：265）。その他、1650年にはオランダ船ウイッテン・ファルク号が「種々の粗製磁器145個」、1651年にはトンキン華僑の船が「かなりの量の粗製磁器」を輸出したとある（山脇1988：266）。いずれの記録にも「粗製」とあるが、それは中国磁器

とくに景德鎮産の磁器と比較した場合の表現であって、海外市場に少しずつ進出し始めたと言ってもまだ質的にも量的にも中国磁器の市場の全てを引き継げるだけの力はまだなかったのである。

まず製品の質的な向上は、有田が牽引した。1640年代後半～1650年代にかけて、技術革新を行い、「粗製」の磁器から景德鎮並みの水準の磁器を生産するようになった。波佐見など有田の周辺の窯場にも技術革新の波は及んだが、開発された新技術の全てを取り入れるのではなく、取捨選択しながら、必要な技術を取り入れていったようである。

技術革新の先駆けであり、その後の肥前磁器（とくに有田焼）の発展に大きく寄与した色絵技術が1640年代後半には始まる。例えば、酒井田柿右衛門家文書の「覚」には、次のように記される（有田町史編纂委員会1985：551）。

一、赤絵初り、伊万里東嶋徳左衛門申者、長崎ニ而志いくわんと申唐人の伝受仕候。尤、礼銀凡拾枚程指出申候。左候而、某本年木山に罷居候節、相頼申候故、右赤絵付立申候へ共、能無御座候。其後段々某工夫仕、こす権兵衛兩人ニ而付立申候。左候而、かりあん参候年六月初比、右赤絵物長崎持参仕、かうじ町八観と申唐人所へ某宿仕、加賀筑前様御買物師埒市郎兵衛と申人ニ売初申候。其後も、赤絵物唐人・おらんだへうり候儀某売初申候。

つまり、伊万里商人の東嶋徳左衛門が唐人の「志いくわん（四官）」によって伝授され、それを当時、年木山（現在の有田の泉山）にいた初代酒井田柿右衛門である喜三右衛門が試みたことである。当初はうまくいかなかったが、少しずつ工夫しながら、こす（呉須か）権兵衛と色絵付けを行い、ガレオン船が来航した正保4年（1647）6月に長崎に製品を持参して、かうじ町八観（八官か）という唐人のところに滞在して、加賀藩の御買物師の埒市郎兵衛に初めて売り、その後も色絵製品を唐人やオランダへ売ることになったという。

肥前の朝鮮人陶工も「唐人」と記されていることからわかるように、唐人は必ずしも中国人を示すわけではないが、この「覚」に記された唐人の「志いくわ

ん（四官）」、「かうじ町八観」は中国人とみてよいであろう。唐人が商人として肥前磁器の流通だけでなく、伊万里商人とともに窯業技術を含めた生産の分野にまで関わっていたことを示している。長崎にはヒトとモノ、それに伴う技術や情報など形ないものも往来していたことがわかる。

特に当時はまだ唐人屋敷もなく、唐人たちは長崎市内に日本人とともに雑居していた。出島の中にはほぼ押し込められていたオランダ人と異なり、唐人は技術の伝授といった関わりを日本人と広くもつことができたのである。

さらに金銀焼付の製品については次のように続く（有田町史編纂委員会1985：552）。

一、金銀焼付候儀、某付初申候。諸人珍敷由申候。
丹州様御入部之節、納富九郎兵衛殿御取次
を以、錦手富士山之鉢、ちよく相副献上
仕候。其節、御目見へ被仰付候。其後、錦手
道具、中原町長右衛門・吉太夫長崎へ持参仕
候。以上。 喜三右衛門

有田の中原町（中野原町）の長右衛門・吉太夫が長崎に持参したことが記されており、やはり長崎が生産者と消費者を結びつける空間であったことがわかる。国内市場については、前掲の「御買物師」が集まっていたであろうし、海外市場については、長崎の地元商人に加え、オランダ商人や唐人がいた。生産者は新商品を開発しては長崎に持ち込み、そして、長崎で新たな需要の可能性に触れては生産地に情報を持ち帰ることが繰り返されていたことであろう。

色絵技術や金銀焼付の他にも、素焼き（本焼成における変形を防いだり、吸水性を高めて細かい絵付けを可能にし、釉薬との親和性を高めるために、成形後、一度低火度で焼成すること）、墨弾き技法（墨を用いて、白抜き線を表現する技法）、ハリ支え技法（皿の底がへたらないように、底にハリと呼ばれる円錐形の道具をあてて、焼成する技法）、糸切り細工技法（轆轤を使わず変形皿などを成形する技法）、窯の耐久性を増すためにトンバイ（耐火レンガの一種）を使用する築窯技術、中・大皿まで匣詰が可能となる紐作りボシによる焼成技法など、築窯、成形、装飾、窯詰、焼成など多くの工程や分野で新しい技術が開発されていった。色絵技術のように唐人から学んだ技術もあれば、ハリ支え技法のように唐船がもたらす中国磁器に近づけるために開発された技術もあった。これらの技術の開発と普及により、景德鎮並みの磁器が生産できるようになり、質的には世界の

需要に応えられるものになった。その結果、商品としての検討を重ねていたオランダ東インド会社が1659年に有田に対して大量注文を行うのである。

3. 肥前磁器の海外輸出の本格化

明が減んだ後もその遺臣の鄭成功は、清に対して抵抗を続けていた。海商であり、軍人でもあった鄭成功は、長崎県の平戸で生まれた日中の混血児であった。父は中国人の鄭芝龍、母は日本人の田川まつである。彼は海上貿易から得る富によって勢力を拡大していたため、清は鄭成功一派の勢力をそぐために、海禁政策をとった。すなわち、1656年に海禁令を公布し、商民の船が私に自ら出海すること、食料・貨物等をもって成功らと貿易するのを厳禁した。さらに1661年には海禁令を強化した遷界令を公布し、主として江蘇・福建・広東の沿岸30華里の住民を内地に移し、商船の出海・貿易を禁じた。鄭成功一派を孤立させようとしたのである。鄭成功一派が海上貿易で取り扱っていた重要な商品の中に陶磁器も含まれていたが、1656年の海禁令によって、「大陸からの磁器輸出は全面的に、すなわち日本にばかりでなく、台湾・マニラ・バタビアなどにもほとんど止まった」（山脇1988：276）。17世紀前半においては国際商品としての磁器は実質上、中国の特産品であったため、鄭成功一派は磁器貿易そのものができなくなってしまった。そこで中国磁器の代替品として白羽の矢が立てられたのが、当時、成長著しい肥前磁器であった。1656年の海禁令後の1658年の11月5日から8日までに長崎を出帆した7艘の唐船は大量の各種粗製磁器を積んで、すべて鄭成功の支配下にある廈門と安海に向かっている（山脇1988：276）。実際に廈門付近の金門島では1650年代に生産されたと推定される肥前磁器の染付芙蓉手皿が採集されている（野上2013）。肥前磁器の海外輸出にとって、鄭成功が果たした役割は大きく、おそらく肥前磁器の産業に最も大きな影響を与えた唐人の一人と言ってよい。

そして、海外輸出の本格化は、肥前の窯業の生産体制にも大きな影響を与えた。まず肥前磁器が国内市場に浸透していく1640年代については、単純に窯場を増やすことで対応してきた。1637年の窯場の整理統合によって、一度は窯業圏の規模そのものが縮小されたが、国内需要の高まりにより、有田も波佐見も窯場を増やしている。有田では広瀬山、南川原山、応法山などが新興、再興され、波佐見では三股山に加えて中尾山が開かれた。続いて1650年代に入ると、有田の東部地区（後の内山地区）で窯場の再編成が行われる。まず地区内のインフラ整備が進んだことや泉山陶石の供給が制度化されたことにより、泉山磁石場に近い位置にある窯場が廃されている。自由に採掘できる環境があれば、泉山磁石場に近いと有

利であるが、供給が制度化されるとそのメリットは小さくなる。次いで1660年代にはさらに川の上流域の窯場がなくなり、1670年代には有田の東部地区を貫く幹線沿いに窯場が集約されている。東部地区で最初期に築かれた天狗谷窯は、「水木宜故」にその土地が選ばれている（有田町史編纂委員会1985）。すなわち、水と燃料が豊富な自然環境のよい土地が選ばれたわけであるが、1670年代にはそれぞれの窯場がそれぞれ地理的条件を選んで築くというよりは、東部地区全体で機能的な生産が行えるような窯場の配置になっている。それを最も端的に示すのが赤絵町の成立である。それまで各窯場が有していた色絵の工程を窯場から切り離し、東部地区の中心に集約させたのである。そして、窯場が集約される過程で技術水準の低い陶工が淘汰され、東部地区以外の窯場にそれらの陶工が移転していった。そのため、極めて短期間に有田の東部地区では前述の技術革新が図られ、一般化したのである。有田東部地区が目指したところは、単に量的に大量に生産するのではなく、高品質を維持しながら、多品種のものを量産する体制であった。

一方の波佐見の場合、専ら窯場を増やすことで海外輸出の本格化に対応した。『皿山旧記』によれば、寛文3年（1663）に稗木場山、寛文5年（1665）に中尾下登窯、寛文6年（1666）に永尾山、寛文7年（1667）に木場山がそれぞれ開窯したと記されている。中尾下登窯は既存の中尾山の中での窯の増加であるが、その他は窯場そのものが新たに興ったものであった。海外輸出の本格化を直接的な要因として、窯場を増加させており、生産する製品も海外向けの製品の割合が高い。しかも東南アジア市場向けの製品が主体であり、唐船による中国磁器貿易の減退がそのまま波佐見の窯の増大につながっているとも言える。その他、海外輸出の本格化は、有田、波佐見以外の窯場にも影響を与え、新興の窯場が各地に築かれていった。

それでは、当時の海外輸出品がどのようなものであったか。それは長崎の出土遺物から知ることができる。長崎は寛文3年（1663）に大火に見舞われている。大火に伴う遺構が長崎市内の各遺跡から発見されている。万才町遺跡、興善町遺跡、五島町遺跡など、火災を示す遺跡は当時の町域に広く分布している。海禁令から7年後、遷界令から2年後の大火であるため、この火災層に伴う陶磁器の中には、大量輸出時代の初期の陶磁器が数多く含まれている。複数個体、未使用とみられる製品がまとまって出土している例もあり、蔵などに納められていた商品の在庫と推測される。

当時の主な海外向け製品をいくつかあげると、染付日字鳳凰文皿、染付見込み荒磯文碗、染付芙蓉手皿などがある。いずれも本歌を17世紀前半の中国磁器に求められるものである。

染付日字鳳凰文皿は、ベトナムで数多く出土する口径14~16cm程度の小皿である。見込みに太陽を意味する「日」字を入れ、その周囲を鳳凰が廻る図柄をもつ。有田の東部地区(後の内山地区)の楠木谷窯、西部地区(後の外山地区など)の掛の谷窯などで大量に生産された。掛の谷窯は、染付日字鳳凰文皿を含めた染付小皿を中心に量産した窯であるが、染付日字鳳凰文皿とそれ以外の小皿では口径が異なり、染付日字鳳凰文皿の方が一回り大きく、中国磁器の青花日字鳳凰文皿に近い(野上2002b)。染付日字鳳凰文皿は海外のみに流通したものではないが、海外市場を意識して生産されたものであることは確かである。

染付見込み荒磯文碗は、17世紀後半に操業した大半の磁器窯で生産された製品であり、かつほぼ海外市場向けに生産されたものである。見込みに波濤から飛び出す魚(鯉)の様が入り、外面には龍や鳳凰が描かれている。東南アジア各地の遺跡で発見されているが、インド洋以西の地域ではまだ出土例をみない。国内の消費地遺跡でも時に見られるが、肥前一带で生産された量を考えると、国内市場はほとんど視野に入っていないと言ってよい。東南アジアでは、ベトナム、タイ、カンボジア、ラオス、マレーシア、インドネシア、フィリピンなど多くの国の遺跡で出土しているが、特にタイやカンボジアでは、出土する肥前磁器の多くが染付見込み荒磯文碗とその類品である。

染付芙蓉手皿は、東南アジアの中でもイスラーム圏の地域やヨーロッパ人が進出している地域でよく出土する。内側面は染付によって区画されており、それぞれの区画の中に花卉文や宝文が描かれたもので、見込みには花鳥文や花虫文が入る。日本では内面の文様全体が芙蓉の花のように見えるため、「芙蓉手」とよんでいる。そして、品質によって大きく二つに分けることができる。ここでそれらを粗製芙蓉手皿と上質芙蓉手皿とすると、前者はインドネシアやフィリピンなどで出土しているが、最も数多く出土しているのはフィリピンである。マニラやセブの各遺跡で出土している。生産窯は、広瀬向窯、弥源次窯、窯の谷窯、多々良の元窯などの有田外山地区の窯場、吉田窯などの嬉野地区の窯場などである。後者も同じくインドネシアやフィリピンなどで多く出土するが、東南アジア以外の地域、すなわち、ヨーロッパ世界などでも出土している。「世界」とつけたのは、すでにヨーロッパ諸国がアジアなどに植民地や拠点を築いていたため、ヨーロッパの人々の需要がヨーロッパにとどまるものではなくなっていたからである。そのため、インド、東アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ大陸などにも広く出土地が分布する。生産窯は、稗古場窯や猿川窯などの有田内山地区の窯場、柿右衛門窯などの南川原地区の窯場など技術水準の高い窯場で生産されている。

初期の大量輸出時代においては、オランダの注文品を除いて、このように前代

に流通していた中国磁器を模倣しながら、海外向け製品を生産していたが、やがて文様などが和様化していき、特に色絵の世界で意匠的に肥前磁器が世界の陶磁器をリードしていくようになる。

4. 肥前磁器の海外輸出の担い手

肥前磁器は世界各地へ長崎から積み出されたが、いわゆる「鎖国」時代に長崎に入港できた船は、オランダ船と唐船であった。日本の船は海外に出かけることはできなかったため、肥前磁器を海外輸出できたのはオランダ船と唐船ということになる。それらの船がどのような磁器をどこへ運んでいたか、知るための格好の資料は沈没船資料である。

まず唐船に積まれていた肥前磁器と推定されるのが、鹿児島県吹上浜採集の陶磁器資料である（大橋1985）。東シナ海に面した長い砂浜に1970年代頃より陶磁器の漂着が始まり、これまでに大量の肥前磁器と少量の中国磁器が採集されている。肥前磁器は1650～1660年代の製品とみられるもので、長崎から東南アジアに向けて出帆した唐船の積荷と推定されている。多くは染付や色絵の大碗や鉢である。前記の染付見込み荒磯文碗の類の製品である。

続いてオランダ船については、いくつかの沈没船から肥前磁器が発見されているが、いずれも積荷の陶磁器の主体となるようなものではなく、船上での使用品であった可能性が高い。年代の古いものから挙げていくと、1659年沈没のアーフォントステレ号、1697年沈没のオースターランド号、1712年沈没のザウトドルプ号、1752年沈没のヘルデルマルセン号などである。いずれの沈没船も発見された磁器は中国磁器が主体である。アーフォントステレ号が沈んだ1659年は、オランダ東インド会社が肥前磁器の大量注文を行った年であるが、アーフォントステレ号が長崎に来たのは1656～1657年のことであり、大量注文の直前の頃であった。発見された陶磁器も「粗製」の染付芙蓉手皿や薬用容器のアルバレロ壺などであった。また、オランダ船、唐船以外の沈没船資料の中に肥前磁器が含まれている例は、1745年に沈んだスウェーデン東インド会社の船であるヨーテボリ号から引き揚げられた1730～1740年代と推定される有田産の染付花唐草文皿が挙げられるが、高島裕之によると、この肥前磁器の染付皿には細かい多数の使用痕が見られるという。つまり、商品として積まれた可能性は低いということである。今のところ、確実に肥前磁器を商品として運んでいたと考えられるオランダ船などヨーロッパの船の沈没船資料は発見されていない。

そして、近年、肥前磁器の海外輸出の担い手として、スペイン船が活躍してい

たことが明らかになってきている。すなわち、ガレオン貿易によって肥前磁器が太平洋を運ばれていたとするものである。もちろん、「鎖国」政策下、スペイン船が長崎に入港することはできない。長崎から積み出したのは、オランダ船か唐船である事実は動かないのであるが、いずれかの船が海外市場に運び出した肥前磁器を入手することは他の船も可能であった。

肥前磁器とガレオン貿易との関わりを示す最初の資料が発見されたのは、1970年代のことであった。三杉隆敏がメキシコシティの地下鉄工事に伴い出土した大量の土器や陶磁器の中から肥前磁器を数片、発見したのである（三杉1986）。しかし、当時はどのようにしてメキシコに肥前磁器がもたらされたか明らかにすることはできなかった。「鎖国」時代の日本とスペイン船の関わりを想定できなかったため、オランダ船によってヨーロッパに大量に輸出されたものをスペイン人が入手し、大西洋を運んだと考える方が支配的であった。しかもガレオン貿易のアジア側の拠点であるマニラで一片の肥前磁器も発見されていなかった。その後も議論の題材となる資料は現れず、肥前磁器とガレオン貿易の関わりが議論されることはなかった。

そして、筆者が、肥前磁器がガレオン船によって運ばれたとする仮説を立てたのは、1990年代に入ってからである。その仮説の根拠は、明らかになってきた唐船の活動の実態であった。肥前磁器の海外貿易と言えば、オランダ貿易にばかり注目されていたが、実際には唐船は製品の量においても種類の多様性においてもオランダ船の貿易を上回っていたことが明らかになってきたのである（山脇1988、佐賀県立九州陶磁文化館1990）。特に唐船が東南アジアの現地市場に向けて量産された製品（染付見込み荒磯文碗など）だけでなく、ヨーロッパ世界に向けた製品（上質の芙蓉手皿など）も扱っていたことが明らかになった点は大きな示唆となった。唐船によって長崎から積み出されたヨーロッパ世界向けの上質な製品をマニラのスペイン人が入手する状況を想定することができたからである。しかしながら、その他にもマニラのスペイン人が肥前磁器を入手できたとする証拠は挙げられるものの（野上2002a）、いずれもいわゆる状況証拠に過ぎなかった。やはりガレオン貿易と肥前磁器の関わりを示すためには、マニラで肥前磁器を発見する必要があった。

そして、マニラで初めて肥前磁器の出土が確認されたのは2004年のことであった（野上ほか2005）。以後、マニラのほか、セブシティやボルホーンなどフィリピン各地の遺跡で多数の肥前磁器の出土が確認されている（Nogami2013）。その中にはメキシコシティで発見された肥前磁器と同種の製品も含まれている。これらの資料によりマニラに商業的に肥前磁器が輸入されていて、その一部が太平洋を

越えて、アメリカ大陸へ運ばれていたことは証明されたが、マニラへ長崎からどのように運ばれていたか、まだ明らかにはされていなかった。それは考古資料と文献資料の両面において実証されることとなる。まず考古資料においては、台湾の台南において、メキシコシティ、マニラで出土する肥前磁器と同種のものが発見された。長崎からマニラへ直接、輸出された記録は知られていなかったため、中継地の存在が推測されていたが、その中継地として台南が想定されるようになった。台南は前述の鄭氏一派の本拠地であり、海禁令直後に長崎を出帆した唐船の多くが鄭成功の本拠地に向かったことを考えると、鄭氏が台湾に拠点を移した後は、長崎からまず台南に向かったと考えることは妥当なものと思われる。そして、文献資料においては、マニラの税関記録が台南からマニラへ磁器を輸出していたことを示している。すなわち、方真真が紹介する史料には、次のような記述がある（方2006）。

- | | |
|-------------|-----------------------------|
| 1665年 4月18日 | 茶壺 |
| 1666年 4月2日 | 日本製大皿（盤子） |
| 1668年 4月5日 | 大皿 |
| 1672年 4月19日 | 碗 |
| 1682年 2月18日 | 大皿10梱（每梱30個）、チョコレートカップ1000個 |
| 1682年 4月15日 | 大碗20梱 |
| 1683年 4月11日 | 精緻な大皿60梱（每梱30個） |
| 1684年 1月31日 | 碗10桶（每桶50個） |
| 1684年 3月4日 | 盛湯用100梱（每梱20個） |

日本製大皿とあるのは、肥前磁器とみてよいし、その他の陶磁器も肥前磁器である可能性が高い。海禁政策下のマニラのカレオン貿易は、唐船の活動によって支えられていたのであり、太平洋における肥前磁器貿易もまた唐船の活動なくして存在しなかったのである。

マニラで発見される肥前磁器は、スペイン人によるカレオン船による肥前磁器貿易のあり方を示すとともに、オランダ船によって持ち込まれたものとは考え難いことから、唐船による肥前磁器貿易の一端を示す資料にもなる。つまり、マニラに持ち込まれた肥前磁器の中には、アメリカ大陸に運ばれるような上質なヨーロッパ世界向けの上質な磁器が多数含まれていた。すなわち、唐船が専ら東南アジア方面に向けて輸出していたのだとしてもその製品は必ずしも東南アジア市場向けに限られたものではないということである。

5. 大量輸出時代の終焉

肥前磁器の大量輸出時代も終焉を迎える。清朝に抵抗を続けていた鄭氏が1683年について降伏し、翌1684年には清朝が展海令を公布し、海禁を解いたからである。再び世界の磁器市場は中国磁器によって席卷される。磁器への渴望を満たすように中国磁器が前代に増して、浸透していった。海禁政策が17世紀末に至るまである程度機能していたことを示すものであり、九州の一地方の磁器生産だけでは中国磁器の代替を完全につとめることは難しかったということでもあろう。長崎へも堰を切ったように唐船が来航し、大量の中国磁器がもたらされた。長崎の街も大きく変わる事となる。それまで日本人との雑居状態であった唐人を収容するための唐人屋敷が建設され、その後、新地荷蔵が建設された。唐人屋敷遺跡からは唐船がもたらした中国磁器が大量に出土するが、中国磁器が再び席卷するようになった東南アジアとは異なり、日本の市場では中国磁器が肥前磁器の地位を脅かすには至らなかった。幕府による貞享令や正徳新例などの長崎貿易制限令によって、貿易そのものが縮小されたことも影響したであろうが、何より国内市場においては、肥前磁器がその占有をすでに確立していたため、中国磁器が改めて市場に入り込む余地があまりなかったからである。

国内の磁器市場を占有する上で大きな役割を果たしたのが、波佐見焼である。波佐見においては、唐船による中国磁器貿易の減退を直接的な要因として、窯業圏の拡大が図られたことはすでに述べたが、今度は唐船の中国磁器回帰によって、海外市場のほとんどを失うことになる。そのため、新たな市場開拓を余儀なくされ、国内市場に新たな市場を求める事となる。これまで磁器を使用していなかった階層に向けて、低廉な磁器を量産することを目指したのである。いわゆる「くらわんか」碗である。江戸時代、年代が下がるにつれて登り窯の規模が拡大していく傾向は、有田や三川内などの肥前の主要磁器産地でも同様であったが、波佐見ではその傾向が最も顕著であった。窯規模を拡大して、一度の焼成で大量に生産し、製品1つあたりのコストを下げている。器形も厚手のものがつくられ、文様も画一化や粗略化が進み、そして、重ね焼きが多用された。

18世紀に入っても清が再び海禁を行なった際には、唐船がカップアンドソーサーとみられる「受皿付茶碗 (thee goet)」などを長崎から大量に積み出した記録はあるが(山脇1988)、基本的には唐船は中国磁器を専ら扱うようになり、唐船による肥前磁器の貿易は終焉を迎えた。

おわりに

最後に本文の内容をまとめておく。まず肥前磁器の技術的な土台は、朝鮮半島から連れ帰られた朝鮮人としての「唐人」であったが、生産された製品は、その創始の段階から朝鮮風ではなく、中国風のものであった。「唐船」によって大量にもたらされていた中国磁器を模倣しようとしたものであった。それらは「唐船」によって輸入された「呉須」とよばれる天然コバルトの顔料で文様が描かれていた。しかし、ほぼ完全に模倣が可能になったのは、17世紀中頃の技術革新を経た後のことであった。

明から清へ王朝が交替する中国国内の混乱による中国磁器の輸出の減退に伴って、肥前磁器の需要は増加した。それは肥前磁器の生産に対して質的にも量的にも大きな変化を与えるものとなった。主たる質的な変化は、17世紀中頃の技術革新であるが、それは「赤絵」のように唐人から学んだ技術もあれば、唐船がもたらす中国磁器に近づけるために開発された技術もあった。質を備えた肥前磁器は中国磁器に代わって世界各地に輸出されるようになる。言うまでもなく、その最終積み出し港は長崎であり、積み出した船はオランダ船と唐船であった。ヨーロッパまで肥前磁器を運んだオランダ船に対し、唐船は専ら東南アジアに運び、自らはその域外に出向くことはなかったが、運ばれた肥前磁器はアジアの港市を中継して、さらに域外に輸出されている。例えば、スペインのガレオン船によって太平洋を渡り、ラテンアメリカにまで運ばれている。

しかし、やがて肥前磁器の大量輸出時代も唐船が中国磁器の交易に立ち戻ることで終わることとなる。オランダ船による有田焼の海外輸出はまだ盛んに行われているので、実質的には唐船による肥前磁器貿易、波佐見焼の海外輸出の終焉であった。

引用・参考文献

- 有田町史編纂委員会 1985『有田町史 陶業編Ⅰ』
大橋康二 1985「鹿児島県吹上浜採集の陶磁片」『三上次男博士喜寿記念論文集』陶磁編 平凡社 p275-291
大橋康二 1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
佐賀県立九州陶磁文化館 1990『海を渡った肥前のやきもの展』
デニス・フリン 2010『グローバル化と銀』山川出版社
野上建紀 1994「応法地区における窯業について」『有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館研究紀要』第3号 p1-54
野上建紀 2002a『近世肥前窯業生産機構論－現代地場産業の基盤形成に関する研究－』（博

士論文)

- 野上建紀 2002b 「海外輸出された肥前磁器」『近世日越交流史』柏書房 p317-331
- 野上建紀 2013 「ガレオン貿易と肥前磁器-二つの大洋を横断した日本のやきもの-」『東洋陶磁』第42号 p141-176
- 野上建紀・Alfredo B.Orogo・田中和彦・洪曉純 2005 「マニラ出土の肥前磁器」『金大考古』48号 金沢大学考古学研究室 p1-5
- 方真真『明末清初台湾与馬尼拉的帆船貿易 (1664-1684)』稻郷
- 三杉隆敏 1986『世界の染付6 陶磁片』同朋社出版
- 山脇悌二郎 1988 「唐・蘭船の伊万里輸出」『有田町史 商業編 I』有田町史編纂委員会 p265-410
- Nogami,Takenori 2013 Japanese Porcelain in the Philippines *Philippine Quarterly of Culture & Society*. vol.41, No.1 p 101-121